一　次の――のカタカナは漢字に直し、漢字にはよみがなを付けなさい。

㋐ 駅のバイテンで新聞を買う。

㋑ 次回の公演もマンセキになるだろう。

㋒ バジュツ競技の選手。

㋓ グラムは重さのタンイです。

㋔ ニワには二羽にわとりがいる。

㋕ 西洋料理のシェフになる。

㋖ ぼくはこの家の長男です。

㋗ 弓道の盛んな地域。

㋘ 予定通り出荷しました。

㋙ 遠くで汽笛が聞こえる。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

（都合上、本文は一部変更してあります。）

小学三年生の大志。お母さんは仕事の関係でパリに住んでいて、大志の記憶にはない。毎週土曜日にくるお母さんからの手紙を心待ちにしている。前回の手紙では、お母さんの好きなコスモスの花を知らない大志は一枚の写真を送り、この花がコスモスなのか、これがどこなのかを質問した。さらにお母さんに早く会いたい、それがだめなら電話で話がしたいとも伝えていた。

待ちに待った土曜日。

大志は、いつものようにリビングルームのソファに座り、いつものように胸を高鳴らせ、封筒の封を切った。もちろん、ミュウは膝の上。

大志へ

こんにちは。大志。夏バテしてませんか？　なつかしい写真を送ってくれて、ありがとうね。

大志のしつ問に、答えます。正かいです。この花はコスモスです。よく、この写真のことを思い出したわね。

次のしつ問なんだけれど、はずかしいことに、母さんはこの場所がどこだか思い出せないのです。

今度、里美おばさんに、近くで早ざきのコスモスが取れるところを聞いてみてください。おばさんならきっと、いい場所をしっていると思います。

それから、ミュウは元気になってよかったですね。夏は、なまのお魚はくさりやすくなるから、気をつけてください。

さい後に、電話のことなんだけれど、まえにも言ったとおりに、とてもむずかしいおねがいです。

母さんだって本当は、大志と電話で話したいのです。

でも、母さんの声を聞いてしまえば、大志はいままでよりも、もっともっとさみしくなるはずです。

わかってね。大志の声を聞けば、母さんもかなしくなって仕事ができなくなるの。

大志のことは、一日だってわすれたことはありません。なるべくはやくお家に帰

れるようにがんばるから、大志もがんばってね。

また、来週の土曜まで、少しの間、さようなら。

母さんより

大志は力なく、手紙をテーブルに置いた。

いままでは、手紙を読み終わったあとは明るく嬉しい気分になれたのだが、今日は、とても哀しかった。

仕事ができなくなるのなら、それでもいい。日本に、帰ってくればいい。僕と仕事と、どっちが大事なの？

大志は、心の中で叫んだ。

「お母さん、僕に会いたくないのかな……」

膝の上。ミュウに向かって呟いた。ミュウが心配そうに大志の顔を見上げる。

①いつもはすぐに返事を書くのに、いまは、その気になれなかった。

無性に、母の顔がみたかった。大志は、首をめぐらせた。アルバムが、どこにも見当たらなかった。

リビングルームを見渡す。父の本棚で視線を止めた。一番上の棚の右端。見覚えのある若草色の背表紙……アルバム。

大志は背伸びをし、アルバムに手をかけた。いろいろな本がぎっしりと詰まり、なかなかアルバムを取り出せない。

人差し指と親指で背表紙を摘み、少しずつ引っ張り出す。

もう少し、もう少し……。爪先が痛くなる。アルバムが半分ほど出てきたところで、思い切り引いた。

「わ……」

勢い余って尻餅をつく。本棚からバラバラと、ほかの本まで落ちてきた。

「②まいったなぁ」

大志は、床に散乱する本を拾い集めた。

辞典のような分厚い本を手に取ったとき、ページの隙間から一枚の写真が舞い落ちた。

大志はその写真をもとの場所に戻そうと本を開いた。ページの合間には、封の切られた封筒が挟んであった。

「なんだろう？」
封筒の中を覗き込む。まだ、何枚かの写真が入っているようだった。取り出した写真を、トランプのように重ねて順番にめくっていった。
どの写真も、美しく素敵な風景ばかりが写っていた。
写真の右下に書いてある漢字は難しいものばかりで、大志には、この風光明媚な素晴らしい場所がどこであるのかがわからなかった。
次の写真……「平和の群像」と書かれた、ひとりの女性と、女性の周囲を取り囲む（　Ａ　）人のかすりの着物姿の少年達の銅像には見覚えがあった。
たしか、国語の時間に……。
大志は立ち上がり、勉強机の椅子の背にかけてあるランドセルから国語の教科書を取り出した。
教科書を、パラパラとめくる。ページをめくる手を止めた。大志が手にしている写真と同じ写真が、教科書に載っていた。
「そうだ。この銅像は、『*二十四の瞳』だったんだ」
大志は呟き、写真をめくった。
③「あっ」
思わず、声を出した。
次の写真……赤や白やピンクのコスモスが咲き乱れる小高い丘の花畑……。
大志はソファに座り、母の手紙と一緒に送り返されてきた写真を手に取り、二枚を交互に見比べた。
二枚の写真は、大志と母が写っているのといないのだけの違いで、ほかは、ほとんど同じ風景だった。
写真の右下を見た。「美しの原高原」と書いてある。その下に、02 10 15 の数字が並んでいる。
大志は、写真の入っていた封筒を覗いた。一枚の便箋。取り出し、開いた。

*沖田一志様

取り急ぎ、去年の十月に琴美さんが撮影した写真を送ります。後日、ご連絡を致します。

平成十五年一月　山岡静子

「琴美って……」
手紙を持つ手が震えた。胸が、ドキドキと高鳴った。
お母さんが、去年の十月にこの写真を？　どうして？　お母さんはパリにいるのではないの？　山岡静子という人は誰？
④大志の頭の中に、様々な疑問が渦巻いた。
大志は封筒を裏返す。
差出人の住所は、書かれていなかった。
もう一度、国語の教科書……『二十四の瞳』のページを開く。

瀬戸内海に囲まれた小豆島に……。

瀬戸内海……。小豆島……。いったい、どこにあるのだろうか？　お母さんは、この小豆島というところにいるのだろうか？
一志宛ての手紙には、去年の十月に母がこの六枚の写真を撮影したと書いてあった。
母がパリにいるのなら、小豆島の写真は撮れないはず。
一度、日本に帰ってきたときに撮ったのだろうか？
そうであれば、家に寄るはずだし、手紙にも書くはず。
考えれば考えるほどに、大志の頭は混乱した。
「ミュウ。お母さんは、いま、どこにいるんだろう？」
大志は、足もとで腹這いになり前脚を舐めるミュウに語りかける。ミュウが顔を上げ、目を細めてミャアーゴと鳴く。
「お前にきいても、わかるわけないよな」
大志は呟き、写真を封筒に入れてソファから立ち上がる。
あと三十分で、里美が夕飯を持ってきてくれる五時になる。床に散らかしっ放しの本を、本棚に戻しておかなければならない。
大志は、椅子に上って本を片づけた。
封筒は、半ズボンのヒップポケットの中だった。

『はい、どちら様？』
「沖田ですけど、俊也兄ちゃんいますか？」
『あら、大志君？　ちょっと待っててね』
＊博士の母の声が聞こえなくなり、しばらくして、ドアが開いた。
「いらっしゃい」
「俊也兄ちゃんに、宿題を教えて貰いにきました」
大志は、博士の母に言った。
「まあ、偉いわね。俊也は二階にいるから、入ってちょうだい」
「お邪魔します」
大志は頭を下げて玄関に上がると、博士の母に続いて廊下の一番奥の階段に向かった。
大志はこうして博士の家に来て宿題を手伝って貰うことがあった。
でも、⑤今日、博士の家を訪れたのは、そのためではない。
階段を上ってすぐのドアを、博士の母が開けた。
「俊也。大志君がきたわよ。さ、どうぞ」
博士の母は微笑みを残して、階段を下りた。
「また、掛け算でもわからなくなったのか？」
「ううん。違うんだ」
大志は首を横に振る。そしてたずねた。
「なあ、俊也兄ちゃん。小豆島って知ってる？」
「なんだよ、急に。『二十四の瞳』の小豆島のことか？」
大志は頷いた。
「知ってるよ。香川県ってところにあるんだ」
博士がいぶかしそうな顔で大志をみながら言った。
「小豆島って、どうやって行くの？」
「なんで、そんなこと知りたいんだよ。小豆島に、旅行するのか？」
「うん」
「じゃあ、大志のお父さんに訊きなよ。俺も、地図でしかみたことないから、どうやって行くかまではわかんないよ」
「お父さんには、内緒なんだ。だって、僕、ひとりで行くんだもん」

「え？　ひとりで!?」
大志の言葉に、博士がびっくりしたように大きく眼を見開く。椅子から立ち上がると、大志の正面にあぐらをかいた。
⑥大志自身も、博士以上に驚いていた。小豆島に、ひとりで行くことを決めた自分に。
「お前……」
「俊也、入るわよ」
博士の母の声。大志はドラゴンボールのバッグから算数のドリルを取り出し、ガラステーブルに置いた。
ドアが開いた。慌ててドリルを覗き込むふたり。
「はい、どうぞ」
博士の母が、ガラステーブルの上にロールケーキが載った皿と、大志の前にオレンジジュースのグラス、そして博士の前には牛乳のグラスを置く。
「おばさん、ありがとう」
「このコ、牛乳しか飲まないのよ。なんだか、赤ちゃんみたいでしょう」
言って、博士の母が微笑んだ。
「お母さん、勉強の邪魔だからはやく出て行ってよ」
「はいはい、お坊っちゃん」
博士の母が、冗談っぽい口調で返す。
「もう、お母さんっ」
顔をまっ赤に染め、抗議する博士。いつも大人びた博士のこんな姿をみるのははじめてのこと。
大志は、ふたりからそらした視線をオレンジジュースに落とし、ストローを口に含んだ。
友人同士みたいに仲のいいふたりをみていると、⑦大志の心はつらく、寂しくなった。
「ごめんな。まったく、いつまでも子供みたいなんだから」
いつもの大人びた口調に戻った博士が、牛乳を飲みながら肩をすくめた。
「で……なんだっけ？　あ、そうだ。小豆島にひとりで行くって、⑧本気なのか？」
「うん。本気だよ。僕、小豆島に行くんだ」

ロールケーキをフォークでつっ突き、大志は力強く言った。

さっきまでは、なんとなく口にしていたのだけれど、いまは違う。

博士と、博士の母の仲睦まじい姿が、⑨大志の決意を固めた。

「どうして、お父さんに内緒で小豆島なんかに行きたいんだ？」

博士が、牛乳でできた白い口髭を腕で拭きながらたずねてくる。

「絶対に、ウチのお父さんや俊也兄ちゃんのお母さんや梶谷先生に言わないって約束してくれる？」

大志は、博士の眼をみつめて言った。

「ああ、約束するよ」

「嘘ついたら針千本だよ？」

「大丈夫だって。大志が学校の帰りに我慢できなくなって、おしっこ漏らしちゃったことも誰にも言ってないだろ？」

「もう、僕にも言わないでよ」

⑩博士の眼がなくなり、白い歯がこぼれた。

「さあ、（　Ｂ　）をしたんだから、教えろよ」

「僕のお母さんは……」

大志は、母がデザイナーであること、仕事でパリに住んでいること、毎週土曜日には手紙がくること、欠かさず返事を出していること、一志の本の間に挟んであった写真と手紙のことを話し、最後に、その写真と手紙の入った封筒を博士に渡した。

「この写真は、たしかに小豆島のものだね。それに、去年の十月に琴美って人が撮影したと書いてある。琴美っていう人は、お母さんと同じ名前の別の人じゃないのか？」

首を傾げながら写真と手紙を見比べていた博士が、大志に言った。

「絶対に、写真を撮ったのはお母さんだよ。だって、ほら」

大志は、二歳の自分と母が写っている、コスモスが咲き乱れる小高い丘の写真を博士にみせた。

「あれ、同じ場所だ。じゃあ、やっぱり、この写真を撮った琴美って人は、大志のお母さんなんだな」

博士が、二枚の写真を交互に眺めて言った。

「お前、⑪本気なのか？」

大志の瞳をじっとみつめ、博士が真剣な表情でたずねてくる。

「僕、本気だよ。」

大志もまた、博士の瞳をみつめ返して力強く頷いた。

（新堂冬樹『僕の行く道』より）

語注　＊『二十四の瞳』……壺井栄の小説。小豆島が舞台となる。

＊沖田一志……大志の父親。

＊博士……名前は俊也。小学校六年生。クラスで一番勉強ができて、物知りのため、同級生から「博士」と呼ばれている。大志が尊敬する上級生。

問1　――①「いつもはすぐに返事を書くのに、いまは、その気になれなかった」とありますが、それはなぜですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　母からの返事がみんなにとって予想以上につらいものであったから。

イ　母からの返事を楽しみにしていたのに期待外れのものであったから。

ウ　母からの返事がまったく自分の質問に答えていなかったから。

エ　母からの返事を心待ちにしていた意味がなかったと考えたから。

オ　母からの返事が難しい内容でさっぱり意味がわからなかったから。

問2　――②「まいったなぁ」とありますが、大志は何に対して「まいった」のですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　母の顔がみたかったのに、みることができなかったこと。

イ　アルバムがどこにも見当たらなかったこと。

ウ　なかなか本棚からアルバムが取り出せなかったこと。

エ　爪先が痛くなったうえ、尻餅までついたこと。

オ　本棚からバラバラと、ほかの本まで落ちてきたこと。

問3　（　Ａ　）には、漢数字が入ります。銅像が『二十四の瞳』という小説と関連があることをふまえて答えなさい。

問4 ――――③『あっ』思わず、声を出した」とありますが、大志はなぜ「思わず」声を出したのですか。その理由が書かれている一文を抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問5 ――――④「大志の頭の中に、様々な疑問が渦巻いた」とありますが、「様々な疑問」として**正しくないもの**を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 山岡静子　　イ 母親の居場所　　ウ 自分の生い立ち
エ 写真の場所　　オ 写真の意味

問6 ――――⑤「今日、博士の家を訪れたのは、そのためではない」とありますが、では大志は何のために博士の家に来たのですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 秘密の冒険に誘い出すため。　　イ 博士の宿題を手伝うため。
ウ 『二十四の瞳』の内容を聞くため。　　エ 小豆島への行き方を聞くため。
オ お父さんに内緒にする口実のため。

問7 ――――⑥「大志自身も、博士以上に驚いていた」とありますが、大志は何に「驚い（た）」のですか。本文中から十九字で抜き出して答えなさい。

問8 ――――⑦「大志の心はつらく、寂しくなった」とありますが、なぜですか。その理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 大志は母と会ったことも話したこともないのでうらやましく感じたから。
イ 博士と博士の母があまりにも友人同士みたいにものすごく仲がいいから。
ウ 博士と博士の母がそばにいる自分をまったく無視しているから。
エ 博士と大志の仲をぶちこわしにするような態度だったから。
オ 大志は母と仲よくすることをすでにあきらめているから。

問9 ――――⑨「大志の決意」とありますが、大志の決意が含まれている言葉を、本文中から八字で抜き出して答えなさい。

問10 ――――⑩「博士の眼がなくなり、白い歯がこぼれた」とありますが、これは博士のどのような顔を表していますか。漢字二字で答えなさい。

問11 （　Ｂ　）には、ある言葉が入ります。直前までの大志と博士の会話をヒントに、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア じゃんけん　　イ おしっこ　　ウ 約束
エ ゆびきり　　オ 針千本

問12 ――――⑧「本気なのか？」・⑪「本気なのか？」はともに博士の言葉ですが、それぞれ内容が違います。大志の何に対しての「本気なのか？」という言葉なのですか。最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 小豆島にひとりで行く、ということに対して。
イ お父さんや自分の母親に内緒にする、ということに対して。
ウ 写真が本物であるかどうかを確かめに行く、ということに対して。
エ 写真を撮った人は大志の母親である、ということに対して。
オ 母親に会いに行く、ということに対して。

問13 この文章の特徴を表しているものとして、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 比ゆが多く使用され、読者の想像力をかきたてている。
イ 細かい動作・体の動きから、心の動きを的確に表している。
ウ 会話文を多く使用することで、場面の重さを表現している。
エ 本当に伝えたいことを隠すことで、わざわざ疑問を残している。
オ 現実と非現実を有効に取り混ぜて読者の興味を引きつけている。

三　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

（都合上、本文は一部変更してあります。）

こころは、【　A　】で見ることもできないし、【　B　】で触(ふ)れることもできないから、どうやって調べるのだろう。なにもできないじゃないか。君は、そう思うかもしれない。

でも、そんなに【　C　】をひねる必要はないのだ。君だって、自分のこころの働きを、ぜんぜん知らなかったわけではあるまい。それなら、自分がどうしてきたか、考えてみたらいい。

君には、こころがある。そのことを、①君自身が感じている。どうやってなのだ。そうだ。自分のこころによって、自分のこころを感じとっているのだ。たとえば、君は、怒(おこ)る。怒るというのはひとつの動きだが、怒ると同時に、君は自分が怒っていることを感じとるのだ。目でたしかめているのでも、耳でたしかめているのでもない。怒ると同時に、怒っていることを感じるのが、こころの働きだ。それを、意識するという。②この意識するということが、もの(ヽヽ)にはない。それがこころの特徴(とくちょう)なのである。その意識のおかげで、人間は、自分の心を、自分自身で知ることができるのだ。

ここで、君は、ぼくにこういうかもしれない。

「それはそうだけれど、ぼくは、他人が怒っているかどうかも、わかるよ」

（　1　）、そのとおりだ。③君は、家でも学校でも、他人が怒ったり、悲しんだりしているのを、感じとっている。そうやって、④生活してきたのだ。

君は、⑤会社から帰って来たおとうさんの顔を見て「おや、きょうはおやじさん、ごきげんが悪いぞ。会社でおもしろくないことがあったのかな。それとも、三日前のぼくのあまりよくなかった試験の結果のことを、おかあさんがしゃべっちゃったのかな。こんな日に、おこづかいをねだっても、きっと不成功だな。あしたまで待とう」、なんて考えたりする。

それは、君が、君のおとうさんのこころの動きを知ることができることを、意味している。

（　2　）、どうやって君は、君のおとうさんが怒っているのを知るのだろう。君は、おとうさんの表情を見る。話しかけても、ニコリともしない。返事がなかったり、返事がぶっきらぼうだったりする。動作が、なにか荒々(あらあら)しい。そういうところを、君は観察する。しかし、それは、おとうさんのこころそのものの動きを感じとっているのではない。人間は、こころの働きを、からだに、つまり目に見える形のあるもの(ヽヽ)を通して、外に表している。だから、それを見て、君は相手のこころを感じとるのだ。だから、もし君のおとうさんが、こころのなかで怒っていても、ちっともそれを外側に表わしてくれなかったら、君には、怒っているのか、いないのか、なかなか見当がつかないだろう。

（　3　）、そのときも、ただ、こころの動きがからだに表われても、それだけでは、君にわからないだろう。君は、自分自身のこころの働きを知っていて、それと比(ひ)較(かく)して、はじめて、他人のこころがわかるのだ。

（　4　）、けっきょくは、自分で自分のこころの動きを感じとることが、こころを探る仕事の出発点になっているのである。

最近、だれも彼も、学問や研究は、大学や研究所でやるものだと思っているらしい。いや、学者になり、研究所にはいらなければ、研究はできないものと、あきらめている人【　D　】、たくさんいる。

こころを研究するのも、心理学者になったり、精神科のお医者さんになったりしなければだめだ、こころのことを知るためには、心理学者やお医者さんに、教えてもらうしかない、そう考えているものが、君たちのなかにもいるのではないか。

たしかに、最近は、学問や研究には高いお金を出してりっぱな研究の設備を作り、たくさんの実験の材料が必要なものもある。そうでなければ、できないものがあることは、たしかだ。しかし、こころを知るためには、どうしても大きな研究所がいるということもなければ、大学の教授にならなければだめ、ということもない。その反対に、どんな大きな設備を持っていても、⑥研究するこころと、研究されるこころを、お金で集めてクるわけにいかない。

わかっただろうか。⑦こころの研究は、やろうと思えば、自分ひとりでもできる。ひとりひとりのこころは、こころの実験室だし、こころという研究材料は、君にもぼくにもある。そして、そのこころが、こころを調べる研究者でもある。自分のこころを調べるのに、なんのためらいも、遠慮(えんりょ)も、いらないではないか。そればかり

ではなく、自分のこころを内側から調べられるのは、前にもいったように、けっきょくは、【　E　】しかいない。

つまり、君は、自分のこころの、いちばんすぐれた研究者になれるのである。しかも、どこに行こうと、なにをしていようと、君は自分のこころといっしょだ。だから、いつでもどこでも、自分のこころを調べることができる。それどころか、なにかをし、どこかにでかけることで、そこで、こころの動きを調べることさえできるのだ。

こうして考えてくると、人間が自分のこころを、あまり知らないできたことが、不思議に思われる。しかし、それにも、ちゃんとした理由があったのである。こころの中には、こころのほんとうの動きを、自分には知らせたくない、知らせまいとするしくみがあるからなのだ。知ること、それは、不愉快なことでも、つらいことでもある。自分のこころが、どんなに汚れた、弱い、いやらしいものであってもいいから、あるがままのすがたを見とどけたいというのは、勇気のいる仕事だ。そして、その勇気を持てた人間だけが、自分のこころを見つめることができたのだった。

（なだいなだ『心の底をのぞいたら』より）

問1　【　A　】〜【　C　】に入る最も適切な言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　頭　　イ　目　　ウ　足　　エ　手　　オ　腰

問2　（　1　）〜（　4　）に入る最も適切な言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ言葉は二度使いません。

ア　つまり　　イ　たしかに　　ウ　もし　　エ　では　　オ　しかし

問3　――①「君自身が感じている」とありますが、「君自身」は何をどうやって「感じている」というのですか。これを説明した次の文の（　）に当てはまるように本文中の言葉を抜き出して答えなさい。ただし（　）内の字数とします。

君自身が（　A　六字　）ことを（　B　十字　）感じとっている。

問4　――②「意識するということ」とはどのようなことですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　自分のこころが動くこと。

イ　自分にはこころがあるということを感じること。

ウ　こころが動いた後にそれを自分で感じとること。

エ　こころが動くと同時にそのこころの動きを感じとること。

オ　他人のこころの動きをしっかり認めて正確に感じとること。

問5　――③「君は、家でも学校でも、他人が怒ったり、悲しんだりしているのを、感じとっている」について

(1)　「他人」のこころの動きを感じとることに関係の深いものをA〜Eの中から四つ選び、それらを正しく並べ替えなさい。

A　形あるものを通して外に出る

B　「他人」のこころが動く

C　「君」自身が気づく

D　伝えようと考える

E　こころを感じとる

(2)　「他人」のこころを探るためになくてはならないものはどんなことですか。本文中から二十字以内で抜き出し、その最初と最後の五字をそれぞれ答えなさい。

問6　【　D　】に入る最も適切な言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　ばかり　　イ　しか　　ウ　だけ　　エ　でも　　オ　さえ

問7　――④「生活してきたのだ」の「きた」は**ひらがな**で表記されています。また、――⑤「会社から帰って来た」の「来た」は**漢字**が使われています。このことから考えると、――⑥「研究するこころと、研究されるこころを、お金で集めてクるわけにいかない」の「ク」は**ひらがな**、**漢字**、どちらを使うのがよいですか。**ひらがな**ならば**○**、**漢字**ならば**×**と答えなさい。

問8 ――――⑦「こころの研究は、やろうと思えば、自分ひとりでもできる」とありますが、この説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　こころの研究は、お金がそんなに多くはかからないので、自分ひとりでもできる。

イ　こころの研究は、自分のこころを見とどける勇気があれば、自分ひとりでもできる。

ウ　こころの研究は、今まで重要に考えられていなかったので、難しいけれど自分ひとりでできる。

エ　こころの研究は、心理学者や精神科のお医者さんの手助けはいらないので、自分ひとりでできる。

オ　こころの研究は、不愉快なことやつらいことも多いが、自分自身があきらめない気持ちを持つならば大成功する。

問9　【　E　】には漢字四字の語が入ります。本文中から抜き出して答えなさい。

問10　本文を前半と後半の二つに分けるとするとどこで分けるのがよいですか。後半の最初の五字を抜き出して答えなさい。

国語解答用紙

足立学園中学校一般一回

一

㋐ ㋑ ㋒ ㋓ ㋔ ㋕ ㋖ ㋗ ㋘ ㋙

二

問1 問2 問3 問4 問5 問6 問7 問8 問9 問10 問11 問12 ⑧ ⑪ 問13

三

問1 A B C
問2 1 2 3 4
問3 A B
問4
問5 (1) ↓ ↓ ↓ (2) 最初 最後
問6 問7 問8 問9 問10

受験番号

座席番号

氏　名

得　点

（注）受験番号及び座席番号は算用数字で書きなさい。